

私たちの目指してきた「自然史博物館」がいよいよオープンです！

理事長 天岸 祥光

百年後の静岡が豊かであるために

私たちが目指してきた「自然史博物館」は、静岡県立「ふじのくに地球環境史ミュージアム」という名称でこの3月26日に一般県民にオープンできる運びになりました。NPOとしての運動は平成15年からですから10年がかりでしたが、最初の運動から数えれば実に20年の年月が必要でした。

私たちNPOはこの新ミュージアムに活力とエネルギーを供給していく存在になりたいと思っていますが、もちろんミュージアムの主役は6名の研究員の方々ですから、その強力なサポーターとしての位置づけをしっかりとわきまえた上で、NPOが中心に入り込んだ形は全国的にも珍しく、かつ静岡のミュージアムの最大の特徴でもあります。

このような形態に落ち着くことになったのには、あるいきさつがありました。全国的に何周も遅れてしまった静岡県の「自然史博物館」をどう捉え、どう創造していくべきかを考えるに当たって、以前に詳しく紹介しました「基本構想検討委員会」で1年間議論した時、我々が一番参考にしようとした「自然史博物館」は、兵庫県立“人と自然の博物館”でした。

私たちが注目した兵庫県立の博物館の最大の特徴は、兵庫県立大学の自然・環境科学研究所の教員約20名が博物館の兼務教員になっていることでした。つまり研究所の教員と博物館の11人の研究員が一体となって博物館の業務にあたるという、どこにもまねのできない形態を取ったのです。このような形態を取ることによって博物館の研究員（学芸員）だけではとても維持できない本来の博物館の運営問題を解決しようとしたのです。研究所の研究・教育は、自然・環境に関する基礎研究から、人と自然の関わりまで、博物館と一体になって行うことを目指していて、研究所の教員はこの博物館での社会貢献、管理運営で評価されることでした。このような立派な目標を掲げた



ふじのくに地球環境史ミュージアムポスター
背景写真は浜北で発見されたトラの化石

県立大学を立ち上げた兵庫県の姿勢には全く感服する以外にありませんが、全国の「自然史博物館」でこのような形態をとっている県は皆無です。静岡県では現状では精いっぱい6人の研究員を確保したとしても、問題は果たしてミュージアムを運営するにあたって静岡県でもこのような県大の教員を巻き込んだ形態が可能かどうかということになります。

このような状況を見定めて、静岡県は検討委員会の途中で静岡県立大学に打診をした形跡はありましたが（私は詳しくは知りませんが）、私個人の感想としては、現在の静岡県大の態勢、方向性から考えて、兵庫県のようにはすぐに対応できるとはとても思えませんでした。それよりも各分野の専門家がそろっている私たちのNPOに引き続き仕事をしてもらった方がはるかに効率的であることは明白でしたし、私たちNPOにとっても、そうならば解散する必要もなく、むしろ新しい気持ちで希望を膨らませることができて、県にとってもNPOにとっても好都合だと両者が判断したのはごく自然な流れでした。

このwin-winの関係が、結局基本構想の答申の柱の一本になったのはごく自然の成り行きでした。どうかもう一度基本構想を読み直していただければと思います。そしてミュージアムにおけるNPOの役割の重大さを再認識していただきたいと思います。